

編集責任/田村徹・熊本陵平

音楽を考える

田村 徹

日本は幕藩体制崩壊後、ヨーロッパの文化を取り込むことに奔走した。
音楽もその例にもれない。

明治5年学制発布に唱歌が教科目にありながら、誰がどのように教えどうするのかが皆目見当がつかない状態が続いた。

当時東京師範学校校長井沢修二は「東西二洋の音楽を折衷して新曲を作ること」「将来国楽を起こすべき人物を養成すること」「諸学校に音楽を実施すること」の意見を文部省に提案し文部省は音楽取調掛を設置し、音楽の伝習を行わせる為アメリカよりメソンを招き明治十三年東京師範学校附属小学校、東京女子師範学校附属幼稚園において唱歌の授業を開始した。

以来紆余曲折しながら今日見るような音楽文化を作り出した。

ついでながら私の幼少年期の音楽といえば花柳界で行われる邦楽と、国民小学校で行われる唱歌と巷にあふれる戦意高揚のための軍歌であった。

軍楽隊以外はオーケストラの存在等まったく知ることができなかった。

太平洋戦争敗戦後、日本に戦勝国のヨーロッパ、アメリカの音楽文化が高波のように押し寄せ、ラジオをとおしこれらの音楽を故郷久留米の田舎でも聴くことが出来た。

戦後の音楽事情を雑駁に見ると、敗戦により疲弊しきった日本は、戦後まもなく起きた朝鮮戦争により日本の経済を活性化させ、やがて巷ではピアノ教室が氾濫し多くの子女が教室に通い、モーツァルトやベートーベン、シューベルト等のピアノ音楽に接する事が出来た。

この時代(昭和30年代)は西洋の音楽が学校教育から社会教育へと広がりをみせ、クラシック音楽、ポピュラー音楽(流行歌)の潮流を肥らせ、この二流の境は、判然としないまでも、この色分けは永い間続き地方の多くは今もそのような音楽認識の中にある。

邦楽は学校教育の中に取り入れはしたものの現代邦楽民謡等一部を除き、家元制度の縦割り社会の中にある。

平成に入るとテレビやスマートフォン等のメディアをとうし、流行らせられる音楽が主流となり、そのような市場を主催する側の論理が音楽界を支配するようになった。

始めに述べた井沢修二の「東西二洋の音楽を折衷して新曲を作ること」「将来国楽を起こすべき人物を養成すること」から見れば現在の音楽状況は

・音楽を考える

田村 徹

・嶺南作曲家協会

会談報告

熊本 陵平

・カナダとの連携

原田 大志

お知らせ

編集委員より

音楽的奇胎を作り出しているのではないか。

日本における音楽専門大学や音楽学部、音楽学科を有する大学は「将来国学を起こすべき人物の養成」に答えていない為経営の危機に瀕しているところが多い。

作曲行為は洋の東西を問わず社会変動に無縁ではありえない。

さて、九州・沖縄作曲家協会の会員は何を作り出そうとしているのだろうか？

作り出されたものに対して会員がどのように反応しているのだろうか？

会創生期には作品を持ち寄り聴き比べ評論家(上野晃)をジャッジに、夜を徹して作曲の理念や、方法論について議論することも珍しい現象ではなかった。

会員の顔が見えにくくなった今日、創生期の会で行っていた議論の場を再構築し時代にあった、または時代を先駆けする作品を作り出し、「九州・沖縄作曲家協会の」聴衆(支援者)をふやし、(現状は音楽会を開催しても情けないほどの聴衆しか集まらない)その存在を世に広く知らしめることが強く望まれる。

そのような場で齢80私の音楽論を開陳できればと考えている。

2017年10月20日 嶺南作曲家協会 会談報告

熊本 陵平

10月20日に大邱にて嶺南作曲家協会、Lim 会長、Sung Mi Park 国際担当、Yongchul 理事、九州沖縄作曲家協会、熊本、安川との間で会談を行いました。その際の会談内容を以下にまとめましたので、ご報告いたします。

1. 嶺南作曲家協会 現運営側の状況について

まず、前運営側と引継ぎが一切されていないため、九州沖縄作曲家協会との間にどのような取り決めが過去になされたかが分からない。これは前任の担当者である Chang Min Park 氏が一切記録をとっていない、東アジア作曲家協会以前の協定書も紛失しているためである。現運営と前運営とは友好関係にあるが、派閥が異なるため様々な運営方法も一新すること。また前回の長崎開催の現代音楽祭や今回の嶺南開催の現代音楽祭について、情報共有が遅れたことについても、前運営側から全く情報提供がなかったことが発端となっている。



▲韓国・室内楽ハウス

引継ぎが全くされていないことは、嶺南作曲家協会内でも異例のことで、協会内ではこれはひとえに前運営の責任だと考えている。九州沖縄作曲家協会に対しては、このような混乱を招いたことは申し訳なく思っている。ただ、九州沖縄作曲家協会とは変わらず交流を続けていきたいため、今後においては新しく協定を結ぶ必要があるだろうと考えている。

2. 九州沖縄作曲家協会との交流について

Lim 会長も九州沖縄作曲家協会のイベントに参加したことがあることから、上記引継ぎが無い状況においても、毎年お互いの会員を一名ずつ交換で招待するという理解のもとで進めていた。しかし、九州沖縄作曲家協会側であった、二年に一回のペースでの交流については知らない。もし九州沖縄作曲家協会側がそれを望むのであれば、その方向性も検討することができる。

3. 嶺南作曲家協会側の交流上の要望

まずは過去にどのような協定を九州沖縄作曲家協会と結んだのか知りたいため、九州沖縄作曲家協会側に協定書が残っていれば送ってほしい。

また、今後の交流において、一名だけでの渡航は会員が不安で希望者が少ないため、できれば一名同伴の二名(うち出品者は一名のみ)でお願いしたい。その際、交通費は招待される側が受け持ち、宿泊費および滞在時の食費に関しては招待する側が受け持つことをお願いしたい。

4. 嶺南作曲家協会 音楽祭のスケジュールについて

毎年 10 月中旬から 11 月初旬にかけて開催されており、実行委員会は前年の 12 月に行われる。その実行委員会では、テーマや楽器編成など音楽祭の大筋のことは決定されるので、一月には九州沖縄作曲家協会側に通知することができる。

5. 今回の会談における私見

以上が、会談内容であります。

一番の問題は、これまでの協定内容が全く嶺南側現運営で引き継がれておらず、当然昨年田村会長が行った会談内容も引き継がれていないことだと思います。(東アジア作曲家協会は昨年、田村会長が訪韓した際に、消滅することで嶺南作曲家協会と九州沖縄作曲家協会との間で合意したことは、今回の 20 日会議で再度説明しました。)

また、衛藤事務局長とお話したところ、そもそも韓国との継続交流が今後も必要かどうか検討すべきとのご意見を頂きました。次回総会においては、このことも議案として議論すべきかと思えます。



▲打ち上げにて 演奏者たちと①



▲打ち上げにて 演奏者たちと②

嶺南作曲家協会の Sung Mi Park 国際担当には、3. の要望の件については、田村会長と相談した結果として、こちらの総会が来年春(3月)まで開催されないの、意思決定が難しい点と、嶺南作曲家協会と九州沖縄作曲家協会との間で協定書はなく、信頼関係の元で交流がなされていたので、交流開始当初よりこの交流に携わっている人間がだいぶ異なることと、今後もこのような問題が起りかねないことから、来年春までお互いに協定書作成を検討していこうとの旨を書き送っています。

※なお、今回の嶺南現代音楽祭において、拙作が演奏されておりますが、これは Lim 会長が長崎でお世話になったお礼としてご好意でそのようにとり計らってくださいました。

カナダとの連携

原田 大志

・経緯

皆さんは「カナダ」と聞いて、どのようなイメージを持たれるだろうか。メープルシロップ等もあるだろうが、私などは「カナダからの手紙」という歌が頭の中で流れ出し、それがバラクーダーというお笑い芸人にすり替わって、いつの間にかカナダとは関係ない1979年頃の思い出で終わる、という繰り返し。要するにカナダと言われてもピンとくるものがなかったのである。

そんな私が、カナダのバンクーバーへ視察に行くことになった。

当協会の米倉理事が、現代音楽祭のカナダ公演実現に向けて奔走していただいているのは周知の事だが、その中でバンクーバー・インターカルチュラル・オーケストラ(Vancouver Intercultural Orchestra、以下VICO)との交流が提案されたのは会報に掲載された通りである。ただ、この会報の内容が多岐にわたっており、どうにもわかりにくいところがあるのも確かである。

やはりここは、もう一人現地へ行って様子確かめ、関係者と接触することでさらに前進できるのではないかと、との意見が会長からあり、正副会長と国際交流担当理事の協議の結果、米倉理事のコーディネートの下、副会長の私が視察に行くという結論が出た。そしてその経費は、バンクーバーでミニコンサートを開いて、その収益でまかなうこととなった。これが2017年9月の話である。



・初めてのカナダ

VICOの公演が2017年12月2日にあるということなので、それに合わせて訪問することになった。

バンクーバーは雨季、最高気温7℃、最低気温6℃という、日本ではほとんどお目にかからない気候。寒いけど凍てつく寒さという訳ではない。福岡の方が寒かった。

大韓民国の仁川国際空港経由で行ったので、福岡から仁川まで1時間強、仁川からバンクーバーまでは9時間のフライト、私には意外と短く感じられた。時差17時間。



・VICO 公演

到着した日の翌日、12月2日にVICOの公演を拝聴した。この日はシルクロードがテーマのチャイニーズ特集。演奏された曲もチャイニーズ民謡に近いものが多く、楽器もピパ(琵琶)、二胡、月琴、それに歌が中心。(今回は特別で、いつもとは違うのだと何度も強調された。)

拝聴して、とりわけピパ奏者(女性)がなかなかの強者だと感じた。全体をほぼ取り仕切る感があった。演奏面では西洋風にもシナ風にも弾き分ける優れた技術の持ち主である。プロフィールによると数十年前、中国の楽団に所属していたが、カナダ公演の時に亡命してそのまま住みついているという。そんな彼女を含んでいるにも関わらず、バンクーバーの中国領事館はVICOのこの公演の支援広告を出していた。少々不思議な現象だったが、ここで深くは触れまい。

・VICO と作曲家の幸せな関係

そのリハーサルと公演の間の時間、そして私のミニコンサートの後の時間に、VICO の関係者と話す機会を持った。

その席上には作曲家のリタ上田女史も臨席された。彼女は日本生まれなので、当然のように日本語は不自由なく話す。現在、サイモン・フレーザー大学(カナダのトップ大学)で教授活動もされている。

その彼女から強調されたのは、件のピパ奏者を始め、VICO には、その楽器の名手が集結しているにとどまらず、その奏者しか奏し得ない「裏技」のようなものもいろいろあるので、是非そこまで知ってほしいとのことだった。

まるで VICO のメンバーのように熱弁をふるう上田女史から、VICO と作曲家達の緊密な関係を伺い知れた。(ちなみにレジデンシャル・コンポーザーは別にいらっしゃる。)



・VICO はバンクーバーそのもの

ところで、バンクーバーで何より驚いたのはアジア人の多さである。USA と同じく移民の国なのだが、USA で多いヒスパニック系やアフロ系はほとんど目にせず、チャイニーズ、コリアン、そしてベトナムが多い。これらは街の至る所にある料理店で推し量ることができる。

そして、我らが同胞日系人の多さ！米倉理事の案内で行動したこともあるが、宿屋のご主人と従業員、演奏会場の教会の牧師先生、演奏会で共演した合唱団の皆さん、全て日本語なので、英語を使うのは一日数回のみ。米倉理事も日によっては日本語しか使わない日もあるという。

バンクーバーと周辺都市を合わせてメロバンクーバーと言うそうだが、そこに約 200 万人が居住し、そのうち 5 万人が日系人だという。



その日系人が欧州系の人々のみならず、チャイニーズやコリアンと上手く共生していくことが、カナダで生きる道なのだということを思い知らされた。

そういったカナダ人の生活を想像していくうちに、それは VICO の楽器編成と見事に重なっていることに気づいた。そうなのだ。VICO は単に一緒にやってみたら面白いかも、という興味のレベルをはるかに超えた、バンクーバー住民を音楽的に象徴できる存在、バンクーバーを表現するにはこれしかないという必然から生まれた団体なのであった。

・アイデンティティ・クライシス

多民族国家で生きるということ、例えば在カナダ日系人の場合、まずはカナダ人としてどう振る舞うか、次に日系人としてどう生きるか、常に考えざるを得ない問題になる。日系人として、ということ考えた場合、当然現地の日系人との交流で育まれるものがある訳だが、それだけだといつの間にか日本の本流から大きくそれてしまうこともあるだろう。それが意識的なものなら問題はない。

しかし、日本のつもりなのに日本でなくなってしまっは大変だ。そこで日本の「今」を伝えるものは在カナダ日系人にとって重要になってくる。九州・沖縄作曲家協会もそこに位置づけられ、そこに私達の存在理由も生じる。

・九州・沖縄在住者のアイデンティティ

日本で日本人として暮らす以上、日本人としてのアイデンティティが問題になることはまずない。ただ、アイデンティティを意識しないが故の閉塞感もあるのかもしれない、とカナダを見た後に思うようになった。

人が集まると、そこには労働が生じ、政治も必要になる。でもそれだけでは幸せになれない。心を動かすものが欲しくなり歌が生まれる。それが発展すると、どんな歌が一番心を動かすかを追求することになる。

それが我々の現在のスタンスだろう。

何が一番心を動かすか。それはやはりアイデンティティに立脚したものではないだろうか。これまた我が協会のモットーそのものである。「地域の音楽はいかにあるべきか」

問題は、九州のアイデンティティが何なのか、はっきりしないことである。その点、沖縄ははっきりしているように感じるが、それは九州以北の住人の見方だ。沖縄に生まれ育つと、なかなか見えにくいものもあるという。

やはり物事を客観視するには、ある程度の距離が必要だ。それに鹿児島から青森まではグラデーションで徐々に変化する文化で、やはりなかなか九州は見えてこない。

ところが、米倉理事曰く「作曲家協会を見ているとめっちゃくちゃ九州ですよ」だそうだ。

残念ながら、私にはそこがわからない。カナダ在住だからこそわかるのではないだろうか。

そう考えると、我々自身のために海外の視点を持つことは極めて有意義に思える。しかもアジアの要素が少し入りこんだ VICO からの視座は、我々の気づかない部分に光を当ててくれる可能性も期待できる。

・VICO との交流

今回、リタ上田女史から一つ申し出があった。

彼女には“1000 White Paper Cranes for Japan”というモノオペラがあり、すでに欧米では数度上演されているという。

その内容は、アメリカの小学校の教科書にまで掲載されている話「サダコと千羽鶴」をオペラ化したもの。広島原爆から東日本大震災にまで関わる内容で、日本を題材にしているにも関わらず、日本ではまだ上演の機会がない。一方、今年8月25日にアムステルダムで VICO のメンバーが上演する予定がある。

それが、ちょうど第38回九州・沖縄現代音楽祭の直前であることから、その時期に合わせて VICO のメンバーの一部が訪日し、演奏やワークショップを行うという提案である。経費は会場費以外、VICO が持つという条件で。

我々の現代音楽祭の時間枠は既に一杯だったが、翌日開催予定の「第3回ギルド・ムジカ九州演奏会」は、まだ時間の余裕を少し作ることができたので、そこでそのオペラを一部短縮して上演する事は可能であり、既にギルド・ムジカ九州の総会でそのことは承認されている。

VICO メンバーの演奏に触れ、その前後にワークショップを開き、いくつかの民族楽器の可能性を知る。それは新たな事を知るのみならず、自分自身の再発見のきっかけにもなるのではないかと思うのである。

VICO のメンバーは非常に積極的である。アルコールは全く入っていないのに、あれをやろう、これをやりたいという話で、かなり盛り上がる。この様子は我等の協会の雰囲気と似ている。恐らくクリエイター集団であるからなのだろう。

ちなみに、今夏ワークショップの対象楽器はピパ、サントウール(ダルシマー、ツインバロンと同系の楽器)、ダンバウ(ベトナムの撥弦楽器)、簫の予定。そして奏者は全て五線が読めるとのこと。是非多くの会員に参加してもらい、来たる2019年、バンクーバーにて本協会会員の作品が多く演奏される日を夢見てみたいものだと思う。

・おわりに

整理すると、今年9月1日にリタ上田女史のモノオペラを上演することと、その前後のどこかでワークショップを行うことは決定している。

そして以下の3件が、次の総会での決議事項である。

- ① 来年6月バンクーバーの VICO 音楽祭に参加(出品)する。
- ② 第39回現代音楽祭を VICO 音楽祭と隣接した形で、バンクーバーで開催する。
- ③ 再来年(2020年)VICO を招聘する。

多分③の招聘事業が一番検討を要するだろう。問題となるのは資金と集客。ただこの二つは VICO を招聘しようがしまいが問題となる事項である。よって福岡チームは既に動き始めている。

具体的には、資金集めとしてまず助成金獲得を従来の数倍の規模で申請中である。これは今年の現代音楽祭のためであるが、これを期に毎年挑む心算がある。加えて、クラウド・ファンディングという新しい方法の検討に入った。

集客についても 2020 年を一つのゴールと考え、3 年がかりで、ある程度のファン・支援者を開拓するという方向で動き始めた。それは、毎年現代音楽祭を福岡で開くという意味ではなく、何らかの形で公演を持つということである。やはり、同一地域で継続して開催がないと、また聴きたい聴衆をファンに導くことはできないだろうから。

今、日本人はおしなべて疲れている。先が見通せない社会だからだ。そのような時代だからこそ、我々の音楽が社会に活力をもたらす一助になるのではないだろうか。それをミッションとして、会員一丸となり面白いものを作り上げたい、と切に思う今日この頃である。

2017年(平成29年)12月7日 第39巻 第49号

バンクーバー新報

ローカル(10)



原田大志さん

原田大志さんによる 家族で楽しむクリスマスコンサート

久しぶりに雨が上がった12月3日、バンクーバー市内の聖十字聖公会で九州・沖縄作曲家協会主催による『原田大志クリスマス・バイオリン・リサイタル』(メディアスポンサー:バンクーバー新報)が開かれた。「お子さまのご来場歓迎」と宣伝したコンサートには小さな子ども連れの家族を中心に会場満席の約70人が参加。バッハ、原田さんのオリジナル作品ほか、NAV コーラスを交えてひと足早いクリスマスムードを楽しんだ。

音楽交流を目的として「私の所属しております九州・沖縄作曲家協会がバンクーバーでの国際

交流コンサート開催に向けて動いていたところ、バンクーバー・インター・カルチュラル・オーケストラ(VICO)とのコネクションができ、2019年6月のVICO音楽祭を日本特報としてくださることになりました。協会員の作品を通して、バンクーバーの音楽ファンや音楽家たちとの交流をしたいと思います」と話すのは、同協会国際交流ディレクターの末音楽志さん。

この取り組みを進めるために同協会副会長である原田大志さんが当地を視察に訪れたことから、NAV コーラスの協力を得てコンサート開催に至ったというものである。

お子さま連れの参加を音楽教育に携わりながらバイオリニストとして活動する原田さんは、どうやって子どもをクラシックコンサートに連れ込められるかが課題のひとつだという。末音楽志さん



お子さま連れで参加できるコンサートを視察した末音楽志さん、原田大志さん(左)と妻の美津子さん

に聴かせてあげたいと思っておりまして。またクラシックコンサートは、たいてい夜遅く開催されるので、小さい子どもを持つ親はなかなか出かけることもできません。今回企画していただくみなさんのご了解を得て、お子さま連れで参加できるコンサートとさせていただきます」と話す。

とはいえ、演奏者にも聴衆側にも集中力が割ける可能性があることも事実。会場隣の部屋には子どもたちが遊べるクラフトテーブルを設置するなど工夫を凝らした。

参加することが大得意。文字通り、会場はお子さま連れファミリーを中心に満席となった。

冒頭で演奏した『無伴奏バイオリンのためのソナタとトルレタ第3番(バッハ)』では、意外にも幼児が静かに座っ

て聴いていたので、原田さんは逆に、この状態をどう維持できるかに心血を注いだという。イザイ・ユーゴージン『NAV コーラス(ピアノ伴奏「お笑い音楽のみなさん」と原田大志さん(中央)、原田さんのピアノ伴奏をしたシェーン・ワグネルさん(右列前)、で書いた自作



コンサートを企画した末音楽志さん(左端)



演奏とほつた会場

め『オ・ナチュール』はラテンのリズム「キキチャチャ」を取り入れた軽快な作品。スペイン色豊かな『音楽とロンド・カプリチオソ』(サンサーンス)の気持ちはNAV コーラスと合わせたクリスマスソングでエンディング。和室くん(3)と一緒に参加した児童が「子ども連れの来場でも安心して楽しめました」と感想を述べた。

「コンサート」に参加するご家庭が大切な理由として原田大志さん。2019年のVICO音楽祭開催。また2020年のVICO日本ツアーに向けて、日知の音楽交流の場、手を広げようとした。

取材:末音楽志さん

原田大志さんは「たいていバイオリン・ピエゾ・サウンド、東京芸術大学音楽学部卒業、桐文学部大学院修士課程修了。バイオリンを弾く以外に、作曲者としても、指揮者としての役割も果たす。そのほか、札幌交響楽団コンサートマスター、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団の客員コンサートマスターを務める。

2017年、筑波大学制作芸術学部音楽部門で修士を卒業。福岡教育大学講師。元「わが国音楽院音楽院」リセウム(アリエール)指導員(2010年)。WVC(筑波大学)指揮者(指揮者)。

「お知らせ」

2017年度、春の総会について

日時・・・2018年3月31日午後1時より

場所・・・福岡県久留米市天神・木下楽器店(西鉄久留米駅下車徒歩5分)

☎094-238-1111

なお総会終了後木下楽器店ホールにて過日募集したピアノ作品の演奏会を行います。

応募作品作曲者名 1・井財野 友人 2・黒田 寛賢 3・斎藤 武

4・田村 徹 5・田村 洋彦 6・安川 徹

以上、詳しくは会報をご覧ください。

音楽ジャーナル紙面の充実を考えています

*九州・沖縄各県の音楽事情をお寄せください。

*会員各位の音楽に関する原稿をお寄せください。

編集担当 熊本 陵平 岩井 晴輝

掲載画像一覧

- P2: 韓国国会合室内楽ハウス
- P3: 韓国大邱で演奏者たちと1,2
- P4: カナダ公演 1,2
- P5: カナダ視察 1
- P6: カナダ視察 2
- P7: バンクーバー新報



当会ホームページ

URL:

<http://kcaj.net>